

あらためて「いじめ・不登校」を問う

京都教育大学名誉教授・滋賀県大津市教育委員 桶谷 守

Reconsider School Refusal and Bullying

Mamoru OKETANI

皆さん、おはようございます。桶谷と言います。

私は、ご案内がありましたように、中学校の教員をしていました。当時、昭和50年採用ですから、問題行動など、いろいろな、子どもの非行が華々しい頃です。当時の私の出で立ちはパンチパーマにサングラス、半袖のTシャツにショートパンツ、11月まではビーチサンダル、左手にクラッチバッグ、右手にはタバコを持って校内を闊歩しておりました。というのが私の出で立ちです。つい先日もその当時の教え子たちと会ったのですが、私が「ガン」になったので、大津市の教育長を依願退職したのですが、その時と今との変わりように驚いていました。

私は、やんちゃな3つの中学校を経験して教育委員会に入りました。教育委員会に入ったときにやはり「不登校」が生徒指導における中心課題でした。私は不登校担当の指導主事という任にプレッシャーを感じながら仕事をしていました。お話がありました京都市教育相談総合センター「パトナ」が、私の生徒指導課長のときに、教育相談センターとともにできました。「生徒指導」、「カウンセリング」の一体化を目指した取り組みの始まりでした。

亡くなられましたが、日本の臨床心理学の第一人者である河合隼雄先生が、「桶谷君、現場

では『生徒指導』と『カウンセリング』は、背中合わせやけども、一緒にやったらどう？頂上に登ろうとする思いは一緒やけども、ルートが違うだけで狙うところは一緒だから、関わり方とか考え方が違うかもしれないけれど、互いに分かり合うことがこれからの教育の中で非常に有効ではないか」ということで、今から16年前に教育相談センター、そこに生徒指導課という課も入れながら、京都市教育相談総合センター「パトナ」が設立されました。

その当時「不登校」という問題が子どもたちの中で教育課題の中心でしたが、「いじめ」と「不登校」が強く言われ、全国的に取り組みが進められました。不登校の子どもを何とかしたい平成7年にはスクールカウンセラーが全国に配置をされ、そのときに不登校が急激に増えたという皮肉な結果になったのですが、それだけしっかりと見つめられたということになると私は思っています。

先程もご案内がありました、不登校の子どものための学校、前年30日以上欠席していないと入れない学校というのを2つ作りました。「京都市立洛風中学校」、「京都市立洛友中学校」という学校です。今も当時の基本的なスタイルは変わっていません。中学校は、教育課程の年間授業時数は1015時間という文科省の規定があり

ますが、当時、構造改革特区ということがあってそれに申請をして、770時間で認可が下り、現在は特例校という扱いで教育活動を行っています。ぜひとも機会があれば来ていただきたいと思います。

その後、京都教育大学にご縁があり勤めることになりました。そのときに大津のいじめ事案が発生し、「いじめ問題に関する第三者調査委員会」委員への依頼があり、驚きとともに責任を強く感じました。全国で注目をされていたのでいろいろなことがありました。市役所や学校に爆破予告があったり、学校の職員室を警察が家宅搜索するという前代未聞のこともありました。その中で250ページにわたる報告書を作成しました。その頃から「いじめ問題の第三者調査委員会」がいろいろな所で作られていきました。そのような流れの中で大津市教育長の指名を受けました。

今日は、いじめ問題、そして不登校、これら

は何か、共通するものがあり、この課題解決のための共通項がきっとあるのではないかと私は思っています。そこからお話できたらと思っております。精一杯努めていきたいと思っております。よろしくお願いします。

これは（資料1）皆様方よく知っておられますね。文部科学省平成30年度の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」を見ますと、「いじめ」、「暴力行為」、「長期欠席」、ならびに「不登校」、「自殺」した子どもの数、そして「体罰」。これが増加、増加、増加、増加、増加。そして、「児童虐待」も年々増加と、子どもたちを取り巻く状況が深刻化してきていることがこの結果から見てとれます。何故そうなったのかということも考えていく必要があろうかと思いますが、いじめと不登校の課題をどのように捉えて、それに対して私たちはどう取り組んでいくのか、ここからも見えてくるのではないかと思います。

資料1 文部科学省平成30年度

「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」

- ① 小・中・高等学校及び特別支援学校における「いじめ」の認知件数は**543,933 件**（前年度414,378件）と前年度より129,555 件増加しており、児童生徒1,000 人当たりの認知件数は40.9 件（前年度30.9 件）である。⇒ **増加**
 - ② 小・中・高等学校における、「暴力行為」の発生件数は**72,940 件**（前年度63,325 件）であり、児童生徒1,000 人当たりの発生件数は5.5 件（前年度4.8 件）である。⇒ **増加**
 - ③ 小・中学校における、**長期欠席者数は、240,039 人**（前年度217,040 人）である。このうち、「**不登校**」児童生徒数は**164,528 人**（前年度144,031 人）であり、不登校児童生徒の割合は1.7%（前年度1.5%）である。⇒ **増加**
 - ④ 小・中・高等学校から報告のあった「**自殺**」した児童生徒数は**332 人**（前年度250 人）である。⇒ **増加**
 - ⑤ 「**体罰**」は**773件**（前年度838件）微減であるものの、不適切な指導として児童生徒への「**暴言**」が増加している。
- * 小学校で「暴力行為」「いじめ」「不登校」が**急増**
- 「**児童虐待**」相談対応件数（速報値）件数は**159,850件**で、前年度より26,072件（19、5%）増え、過去最多を更新した。⇒ **増加**

これ（資料2）を見てください。皆様方の資料の中にもあります。4年くらい前になりますか、山形県天童市で中学1年生の女子生徒がい

じめでもって自死をしたという事例です。こんなことが書いてあります。

資料2 山形県天童市の1年生女子生徒いじめ自死事案遺書

「オレは、せめてその悪足掻きのため、最後に書こうと思う。
オレは、一人だった。あるいは、独りだった。中学に入学してからは、陰湿な『イジメ』にあっていた。何が悪いのか分からず、ずっと、陰口を言われていた。最初は勿論抵抗した。仲間、味方を作ろうと、
でも、無理だった。無駄だった。無意味だった。だからやめた。自ら、独りになり、心を閉ざした。感情を殺し、周りから目を背けた。傷つかないようにした。気が付けば孤立していた。
元々、独りだったけれど、オレは、一人を、一人を選んだけれど、独りはつらかった。」

という遺書を残して彼女は自死をしました。そしてもうひとつ、青森県中学2年生の女の子

（資料3）。これは皆さんきっと知っておられるケースですね。

資料3 青森市の市立中2年女子生徒いじめ自死事案遺書

突然でごめんなさい。ストレスでもう生きていけそうにないです。

●が弱いのは自分自身でも分かってるし、●が悪い所もあったのは知ってるけど、流石にもう耐えられません。（中略）

学校生活も散々だし、それでストレスたまって起立性になったのに、仮病とかいう人が沢山いて、説明しても、あまり信じてくれなかった。

1、2年の時で●の噂流したりそれを信じたりいじめてきたやつら、自分でもわかんと思います。もう、二度といじめたりしないでください。（中略）

家族へ。先立つ不幸を許してください。もう無理です。特別虐待があったわけでもない（中略）

みんなに迷惑かけるし、悲しむ人も居ないかもしれないくらい生きる価値本当にないし、綺麗な死に方すらできないけど、楽しい時もありました。本当に13年間ありがとうございました。いつか、来世でも●が幸せな生活をおくれる人になれるまで、さようなら。

また、会おうね。

これは中略をしていますが、こういう遺書を残しながらこの中学2年生の女の子は死んでいきました。どう感じますか？ ちょっと学生の皆さんに聞いてみましょう。

この2つの遺書を見て率直な感想。どうですか？

(学生)「自殺する前におとなとか周りの人が手を差し伸べることができなかったのかな？と思います。」

こんなことが起こる前に、何かできなかったのかなあ？はい、あなたは？

(学生)「もしかしたら救ってほしいと思って、助けを求めていたのに、対応はどうだったのかなと思います。」

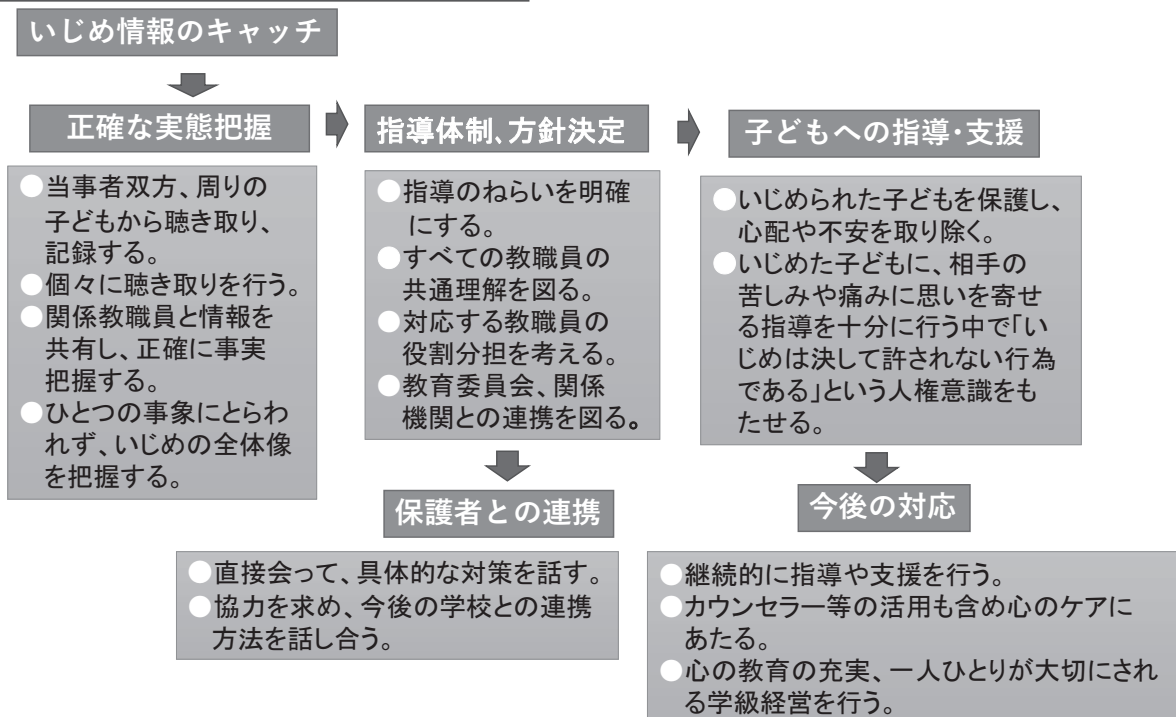
きっと、何らかのサインがあって対応を求めたのだろうが、しかしその対応がどうだったんだろう。ここに共通しているのはやはり頼りになる人がいない、本人にとって四面楚歌状態であったということが言えますね。だから、心理

的には「孤立」ということがやはり大きく窺える。他にもいろいろな要因があったのかもわかりません。こんなことがやはりあってはならない、と思います。

私が第三者委員会で調査をしたときに、遺書がある場合は、何々が原因である、これはやはりいじめを受けた、自分が孤立したことを明確に言っていますが、必ずしも遺書があるに限らない。大津の事案もそうでした。そこからいろいろなものを拾い上げていくのはなかなか難しいですし、あってはならないことがどうして起こったんだろうということについては、当然遺族にとっても「なぜ我が子が」という思いが非常に強いです。そうなる前にどれだけ子どもたち一人一人の心に私たちが寄り添えたのか、ということが大きな課題であろうと思います。

それでは、次に、「いじめ対応の基本的な流れ」についてです（資料4）。

資料4 いじめ対応の基本的な流れ



いじめを学校がキャッチしたときに、こういう形で話をしていきます。実はなぜこんな話をするかといえば、私は大津のいじめの第三者調査委員会の委員のあと大津市の教育委員、教育委員長、大学の定年退職を迎えた後、教育長に指名されました。

その時に私が最初に力を入れたのは、いわゆるいじめの専任教員、「いじめ対策担当教員」を大津市で2億4千万円の予算をかけて市費で入れて頂きました。どこの学校にも1人はいじめ対策担当教員を配置し、授業はゼロです。800人以上の学校は、2人担当がいます。その方も授業ゼロ。やはりいじめ対策を徹底してやろうとすれば、そういうことが非常に大事になってきます。

もうひとつは、これは現場にはすごく負担をかけているのですが、「24時間ルール」というのを決めました。何かといえば、いじめの疑い、いじめの確定はできなくても疑いと教員が感じたらすぐに担当教員に連絡をし、担当教員はいじめ対策委員会を開いて、同時にすぐに電話連絡、もしくはフォーマットされた報告書で、24時間以内に教育委員会へ連絡をするシステムです。

実は、この6年で教育委員会に大津市の小中学校から「いじめの報告書」を送ってもらった枚数は1万7千枚、件数にしたら9千件。人口34万人都市で、小中学校合わせて55校、そのくらいの人数で、いじめの疑いというものが6年間で9千件。それが多いのか少ないのかわかりません。事案発生後24時間以内に学校から教育委員会に報告というシステムは稀だと思います。学校は、24時間以内に、報告書を作成、そして対策委員会を開き、方針を決定し、分担を決め、調査に入り、被害、加害の子どもたちから事情や状況を聞き、双方の保護者にも連絡を

して、またあるときには関係者に伝えるということで、24時間以内にやらないといけないことが相当あります。現場の先生方からこの24時間ルールを何とか緩和してもらえないだろうかという話も出ています。しかし、24時間ルールを設定することによって先生方が「いじめかな？」と感ずることが増える。

たとえば、いじめ担当教員は授業がありませんから、朝は何をするか、子どもたちが登校する頃に、担任の先生は教室。副担任とか教務とかそれ以外の先生は管理職と一緒に校門で登校指導。いじめ担当教員も外にいます。そして子どもの様子を見る。以前から気になっている子どもがいたら、その子どもの様子を聞く。聞けなかったらすぐに電話や家庭訪問をする。そしてすべての子どもたちが教室に入ったら、担任は教室で子どもたちに「おはよう」と1日を迎える。学校は二足制ですから、そのときにすぐに靴の状況を見て回る。靴の中を一足一足すべて異物が入っていないか。いじめ担当教員が見て回ります。

そして、廊下、教室等の中に落書きがないか。いじめがある学級があればそこに応援に入る。休憩時間になれば廊下に立って、子どもたちといろいろな話をしながら様子を見る。先生方の話を聞くと、午前中の休憩時間が圧倒的にいじめの発生が大津の場合は多い。ですから、担任の先生は教室とかグラウンドとか廊下など、自分の守備範囲でなかなか回りきれないことがあるので、地域の方のボランティアを募集しました。「それならやってやろう。」「いじめが起こっているのどこがうか。」と目を皿にして見るのではなくて、昔遊びを廊下でやったり、グラウンドに出て子どもたちといろいろな話をしたりしながら、子どもたちの様子を監視ではなくて、子どもたちと一緒に、多くの目で子どもたちを

見ましょう、その眼差しを持ちましょう、ということに賛同いただいた方に学校に来ていただいて、その隙間の時間を埋めていく。その集約をいじめ担当教員がやるという形で行っています。

でも、この5年間で重大事態、第三者委員会が開かれたのは10件を超えています。

「いじめがあるのではないか？」そんな形で先生方が関わるのではなくて、子どもたちの関係性はどうなのかと、子どもたちの笑顔はそこにあるかと、きのうまで楽しく遊べていたけれど今日何か下向いてたね。といった子どもの仕草であるとか、様子であるとか、そういったところをしっかりと見つめながら情報交換をして「この子どうなんやろ！」と気になったら担任の先生に話をする。担任の先生はいじめ担当教員に相談する。そんなことの気づきというものを大切にしましょうと今やっています。

後でも出てきますが、初期対応が大切です。いじめを教師が発見した場合、早く正確に被害の子どものケアを行い、そして何よりも課題とされる加害の子どもの指導をやれば重篤化、いわゆる深刻化がしにくいというデータがあります。私たちがやらなければならないこと、これはある程度理解されているのですね。でも例えば、誰がやったかわからない、児童生徒を中傷する手紙が机の中に入っていた。加害者不明ですね。被害者はいる。こんなときに長期化したら、重篤化していくケースになっていくのは確かです。ですから、その場合にどのようにするのか、ということが必要になってきますね。そんな中で出てきたのが、私が23年に起きた大津市のいじめ事案のときに、第三者調査委員会でもとめたときの問題点、課題です。

「教員のいじめに対する理解不足」。「これは、いじめかどうか」。「いじめじゃないかな？」「い

いや、いじめじゃないですよ。これは子どもたちのトラブルです。」という先生がいる。全国でどのぐらいいじめの報告があるのか、まだ20%の学校が「いじめゼロ」で文科省に報告している。29年度は25%でした。4分の1、平成30年度の全国のいじめゼロの報告の学校数は20%。まだ5校に1校、5分の1の学校は「いじめゼロ」。いじめの定義からいったときに、本当にそうなんでしょうか。指導のガイドラインに出ているのは「いじめ」という言葉を使わずに子どもたちの指導をする。これは当然あります。ただそれは「いじめ防止対策推進法」第2条の定義、属性が一緒である。そして心理的、物理的な行為が、そして、被害を受けた子どもが苦痛を感じた。いや、この子は苦痛を感じてない。別段ニコニコとして、「どうや？」と聞いたら「うん、大丈夫。」と言っていた。これは本人が苦痛を感じていないからいじめにカウントしていないんですよという人がいますが、そうじゃないのですね。蓋然性という考え方があります。

その行為を他の子が受けたら苦痛を感じる、そういったものが「蓋然性」です。これも当然いじめとして指導すべきだ。「いじめ」という言葉を使うかどうかは別にして、「いじめ」という認識で私たちは指導する。「実は、おたくのお子さんに対していじめがありました。」と伝えれば、保護者はびっくりします。この言葉を使うかどうかは横に置いて、やはりいじめという認識をもちながら指導すべきであると思います。そういったことで、報告が増えていじめの認識が広がっていくということがあります。ただ、皆さん方、現場の先生はここが見えないと思います。このいじめ防止対策推進法は、現場では不評です。ものすごく、不評。ころころといじめの定義が変わってきたためと思われ

ます。

文部科学省への報告は、京都府は年間3万件、佐賀県は800件。子どもの数で割ると、そこにはかつては90倍、今年で12倍、都道府県で差があります。認識によって違うのか、多ければ多いほどいいのかと言えないと思いますが、やはり多ければそれだけしっかり捉えられている。その指導に入っている。教師が認識をしている。そして、そこに対する指導や、指導とともに、それを未然に防ごうとする取り組みがそこから始まる。いじめがゼロでしたとコミュニティスクールや学校から発信をする。何々小学校、何々中学校、今年の本校はいじめがゼロでしたと。輝かしい、素晴らしいことだと思います。しかし、本当にゼロなんだろうか。嫌な思いをし、悲しい思いをした子はいないのか？と素朴に思います。

いじめのアンケートを年間3回、4回やりましょうということになっています。このときに「あなたはいじめを受けましたか？」と直接聞いたら、子どもたちは「受けていません」「ない」ということから「ゼロ」になります。

ところが京都府はなぜ3万件かといえ、あなたは今1年、この1学期、嫌な思いをしたことがありますか？それはどんなことですか？」と聞いている。「いじめ」という言葉があって、それを具体的にすらすらと書けば、厳しい学級の場合、いじめられている子が鉛筆の音をさせていたら「お前何書いたんや。」となる。嫌な思いというのはいじめにつながるいろいろな問題がある。そこで「その嫌な事柄はいつたい何なの？」と担任の先生といじめ担当が見て、「あ、これはもう少ししっかり見ましょう。」と、拾い上げてきたのが3万件。だからこのアンケートでも、単にやる、これを何回も何回もやったらマンネリ化し、形骸化していく。だか

ら、その結果、アンケートを変えていく必要がそこに出てくるのかなと思っています。

「教員間での情報の共有」ができなかった。担任の先生だけ、部活の顧問の先生だけが知っている。「今日、こんなことがあった」、ことを共有したり、必ずしもいじめがあったということだけではなくて、子どものいろいろな変化を学年の教員であったり、周りの先生方で共有することによって、いろいろな問題が見えてくる。そんなことが言えるかもしれませんね。私は最初に言いましたように、パンチパーマで体育の教員です。当時の私の20代～30代前半の身体は胸囲が1メートル7センチありました。脚の太股の太さは70センチ。垂直跳びは95センチ跳びました。頭が軽いからなんぼでも上に跳べるのでしょう。子どもたちの前で、針金を腕に巻いて、「おい見とけよ～」と言って力を入れたら、針金がブチッと切れる。「威嚇の教育」です。そういう教員だったのです。そうすると、私の目の前では子どもたちはピシッとしている。しかし見えないところでは、それはまったく違ってしています。それが子どもたちの姿だと。だから私がいなくて私のクラスは、比較的優しい先生だとザワザワしたり、ある子がいろいろなことで先生に反抗している。そのことが聞こえてこなかったら、私と他の先生との情報の共有がなかったら単なる自己満足でしかない。そういうことって起こりうるわけですね。

それは極端な話ですけども、いろいろな子どもの様子、A君の様子を見たときに、B先生が見たときのA君と、C先生が見たときのA君というのは違うわけです。表情が。姿勢も。学習に対する取り組み方や友人関係も。それは少しずつ違う。違っていいんです。しかし、違っていいことを、それを先生同士互いに知り合うことがすごく大事なんじゃないか、このことが

難しい状況になってきていると思います。

大津の小学校は朝、打ち合わせをしません。校務支援システムで先生方に1台ずつパソコンがありますから、必要事項は、先生が出勤して朝パソコンのスイッチを入れて画面を開いたら、それが出勤の時間として記録され、そこに校務支援、今日必要な事項が教育委員会から、また学校から伝えたい事柄が出てきます。便利です。しかし、読まないこともあります。昔は、職員朝礼、打ち合わせです。今日はこういう行事があります、実はここ1か月休んでいたA君が今日から登校するんです。皆さん、言葉をちょっと意識してください。「よう来たな。」というまなざしはいいのですが、「お前何してたんや。」「しっかりしろよ!」という声かけはやめましょう。普通通りに対応していただいたら。しかしまなざしとしては「がんばって、よく来てくれたな!」との思いで迎えてあげてください。このようなことが朝の職員朝礼で先生方で共有されたら随分違いますよね。

廊下で会ったらアイコンタクトをし、仲間の先生は肩を叩き、そういうことでそのクラスになじんでいけると、「久しぶりに来て良かったよ。」、となる。それらのことは実は情報共有、情報の連携として大事なところなんです。

だから、ただ知っているだけではなくて、知ってわれわれはどうするのか、自分の立場としてどうするのかということがそれぞれ考えられるということです。

それから、大津の問題での3つ目が、「加害の子どもへの的確な指導支援」。今、大津事案から8年経ちました。そして、教育委員会と学校の瑕疵があったということで遺族と和解をしました。ところが、加害の3名の子どもの損害賠償事案、民事裁判は未だに続いています。大津地裁は、原告いわば遺族が勝訴しました。来

年2月に高裁の判決が出ると予想されています。たぶん地裁と同じ形に出るだろうと思っています。

加害とされた子どもたちが未だに、あの大津いじめの事案の加害者であるということを背負いながら、今も民事裁判で係争しています。第三者調査委員会の調査では、顔に猫のひげを描いた、殴った、パンを勝手に食べた。ガムテープで身体をぐるぐる巻きにした。ハチの死骸を顔に乗せて食べさせようとしたなど、19項目認定しました。この事実は加害の3人は皆認めています。が、当時はまだ法律もなかったですから、当時の認識で言いますと「行為はあったが、いじめはしていません。」。そこなんですね、まだ争っているのは。その事実認定は加害の子はしていない。そのことはいじめ行為につながるよね、ということはきっと理解していない。そこは学校とか関係者が加害とされた子としっかり話ができたなら随分違ったと思います。未だに残っているのは、「なぜ子どもが亡くなったのか?」というものは、それはその被害の子どもへの保護者の虐待によるものであるという風説がありました、ネットでも出ました。第三者委員会の調査の結果、虐待はなかったことをはっきりと明確にしました。これは自死の要因はいじめが大きな要因だと報告書に書きました。そこは違うところです。ちょっと話がずれて申し訳ありません。こうした中での、加害とされた子どもの指導はすごく大変です。日常の危機感。リスクマネジメント。また、何か起こったときのクライシスマネジメントといった日常の危機管理が重要です。また初期対応の拙さ、稚拙さが出たことも問題点として挙げられる。

次に全国のいじめ重大事態で明らかになったことを見ますと、これらのことが挙げられた。

個人としては①「いじめ」に対する認識、理

解不足、②事案に対する思い込み、先入観、③初期対応の拙さ、一緒です。初動の遅れ、④保護者への対応の不十分さ、⑤生徒理解の不足、欠落、⑥記録がない、⑦先生の問題の抱え込み、これが個人の要因です。

組織としては、①教員間での情報の共有、②管理職と教員の意識の乖離がある、風通しが悪い、③いじめ対策委員会の会議の形骸化、決定事項の報告のみで議論がされていない、④意見が言いにくい雰囲気がある。いじめ対策委員会で、本当に平場の中でいろいろな人がしっかりと自分の意見が言えるのか、⑤原因究明が徹底されているのか、⑥いじめ加害者への指導・対応ができていない、というようなことがあいつて、いじめの深刻化、重大事態に。30年度は全国でいじめの重大事態が602件です。29年度は474件。602件なんです。すごい数です。

「いじめで亡くなった」とされた自死は10件。しかし、270件はいわゆるいじめ防止対策推進法第28条重大事態の1号、いわゆる生命の安全、心身、財産に関する重大事態です。そして2号が不登校の重大事態が420件に上っています。

何が言いたいかというと、平成29年度児童生徒の問題行動の「いじめ」について、総務省が文部科学省と法務省に対して、勧告書を出している。財務省がこれらを調査するのは、予算がどう執行されたとか、本当に有効なのかどうかでよくやるのですが、総務省がこの取り組みを行うのは珍しいです。これは、重大事態の66件の報告書から、詳らかに報告書を見たときに、何が要因なのかをこの勧告は出しています。1つはここに出ています。赤線を引いておきました。「いじめの認知に関わる問題」。ということは、学校の先生などでいじめが正確な認知をされていない。いじめがいわゆるいじめ防止対策推進法の第2条の定義ではなくて、昔のまま、

継続性であるとか、大勢でやるというような、昔のままの定義でそのまま認定しているためにこうなりました。2つめ、「学校内の情報共有にかかる課題」。いわゆるいじめ対策委員会が開かれたり、またそこで情報が共有されていない。3つめ、「組織的対応にかかる課題」。組織でこうした問題をどうしていくか、被害の子には担任の先生と教育相談の先生お願いしますね、加害の子は学年主任と生徒指導の担当の先生で聞いてください。そして持ち寄って合わせましょう。被害の子の保護者は担任の先生が、加害の子の保護者は学年主任が今日中にその事実を伝えましょう。

それらをいじめ対策委員会で集約をし、しっかり方向性を決めて情報を共有し、取り組みの共有もそこでしていくことが本来的にはなされるべきです。しかしながら、現場は非常に忙しいという理由で、必ずしもこのような手順で行動がなされているとは限らないです。

私は京都市と津市の学校現場に入って先生方と話をすることがあります。「いじめ防止対策推進法を読みましたか？」と聞きます。「うーん、以前読んだこと、ちらっと見たこと読んだことはありますが、中身は覚えていません。」「重大事態のガイドラインを読みましたか？」と聞くと、「うん、あるのは知っていますが、中身はわかりません。」と返ってきます。また、校内研修に呼んで頂いた時にも、最初に先生方に聞きます。「先生のところのいじめ防止対策の基本方針、ありますよね。ホームページに出てますよね。これ、先生のところの学校の特色ってなに？」と聞きます。10人いたら10人の先生が答えられません。いじめ担当と生徒指導主任の先生はその学校の特色なり、その学校の指針を知っている。そこなんですよね。だから、丸暗記をする必要はなにもない。「うち

の学校で一番大事にしているのは？」「情報の共有です。何かあったら必ずいじめ対策委員会が開かれ、翌日には全員の教員がその事実を知っています。」とか。「その日に起こったことはその日に解決しようということで、私たちはやっている。」とか、その学校なりの思いが出てきてほしいとは私と思いますが、残念ながらそこまではできていません。何も、先程も言ったようにその学校の指針をすべて覚える必要はないのです。学校ごとにそんなに変わらないです。でも、その学校が一番大事にしていることはもちろんあると思います。いじめを防止するために、子どもの表情をしっかり読み取ろう、今年のラストの研修は、その子どもの表情の読み取り研修をしましたとか。

私は人が人と集まったら、いじめとかトラブルは当然起こる、起こって当たり前です。人がちょっと失敗した、大きな失敗ではなくて、ケガではなくて、ちょっとつまづいた。自分の大学の授業で、尊敬している、いつもカチッとした先生がこういう机の角でつまづいて、こけそうになられたとき、「くすっ」と笑ってしまう自分がいませんか。「何してんの」と声は出しませんが、なんか笑ってしまう。ことわざにも、こういう言い方は問題があるかもしれませんが、「人の失敗は蜜の味」というのがあります。おもしろいんです。だからテレビで何度も何度もダチョウ倶楽部が熱湯の水槽をまたいで、そして後ろを見て「押すなよ、押すなよ。」という言葉で合図でドボンと落とされてバチャンと入って「熱つつ！」となる。何度もあの場面を見ていますよね。何故あの場面が何度も何度もテレビに出てくるのでしょうか？ ニーズがあるからです。あれは、なんのニーズかといえば、面白いからです。彼らはそれが約束をされて、それを笑いのネタにして、コメディア

ンですから、お金をもらっている。そこでもって心を傷つける人はいませんし、それを見ての人がケラケラ笑う。そのニーズがあるということは、ああいう場面を見ることが、すごく求められていることが分かります。ストレス社会の中で一日働いて、「あ〜しんど。」と帰ってきたお父さんがビールを1杯飲みながらテレビでああいう馬鹿話や、言葉は悪いですけど、ああいうことが起きると「あはは！」と言って何も考えずに笑える。そういうニーズがある。われわれの心の中に、そういったものを容認する、そういったものを求めるものが、生まれ持って組み込まれているんです。違う言い方をすれば攻撃性というものがDNAの中に、その攻撃性の濃淡はいろいろですが、皆さん方の中にもあるのです。

私、大学の4年生のときに、牛のお肉の精肉工場、当時は電気で牛を殺っていません。皆さん、どうやって肉になるか知っていますか？ 牛が引っ張られてきます。屠殺場に引っ張られてきます。「も〜、も〜。」と嫌がっているようです。しかし、あるところまで来たら、牛は観念します。そして、鼻につけられたひもを柵のところに結びつけ、そのときに係の人が持ってきたのは、ピストルの形をしたもので、ピストルの引き金を引くと、3センチほどの鉄心がボンと出るんです。それを、ここに、額の真ん中にパツーンと当てます、これ牛殺しと言います。すると頭蓋骨が割れる。その後、その係の人が1メートルくらいの竹の棒を持ってきて、頭蓋骨の割れたところから中に入れてガーッと脳みそをかき回します。そうすると、コテンとひっくり返って、痙攣する。「うわー、ひどいことするな。」と声を上げてしまった。そのときにその係の人が私に、「これは、ひどいことやないのや。早くいかしてあげないと苦しい思いを

さすのがかわいそうだから、早くいかしてあげ
るためにこれをしている。間違ったらあかん
で。」と教えてもらいました。そこから首を切っ
て、皮をはいで、その皮を使う。そして胴と足
の部分を4等分します。それを上から吊る。そ
こを見たことあると思います。私の仕事は、牛
の食道、お腹の胎児、子牛、これは食べてはい
けないことになっています。食道は掃除機の
ホースみたいな形をしている。当時は産業廃棄
物という認識がなかったために、近くの山に私
たちが穴を掘って、そしてその使えない内臓な
ど集めて穴に埋めていくのが当時の仕事。1日
2万円。昭和47年に1日2万円という仕事はあ
りません。その仕事をやったとき、お昼に、「あ
〜、君は学生か。おいで、ホルモンできたで、
食べてみ。」。食べられますか？ そういう目の
前でいわゆる生きたものがお肉になる、相当の
ショックでした。

皆さん方は牛が放牧をされたり、牛舎で牛が
世話をされてる、これはテレビで見ます。お肉
になる、精肉になるプロセスを見ていませんよ
ね。でも、それを誰かがしなかったら、私たち
は生きながらえないのです。だから「命をいた
だきます。」と言って、食事のたびに「いただ
きます。」をしている。「いただきます。」とい
うのは「ご飯をいただく」のではなくて、動植
物の命をいただくということですね。そういう
ことの認識が、皆さん方はそういうものをきっ
と家庭教育や学校教育、また社会教育の中で学
んで来られたために、「命が大事だ」というこ
とがわかるのです。

その攻撃性の濃淡はあるものの、そういった
攻撃性というのが人間の中にあるということ
が、やはりいじめの大きな要因だということ
ですから、やはりいじめは起こるのです。起こ
らないように最大限の未然防止をする。起こって

しまったらすばやくそれに対応する。このこと
に尽きるのです。

ところが、いじめの第三者委員会、いじめの
調査もそうですが、いじめが起こってから、そ
ういったことばかりクローズアップされるん
です。大きなことが起こらないためにどうする
のか、すぐに何をするか、初期対応をどうする
かということが大切だと思います。

参考までに今日もってきましたのは、学校か
ら決まったフォーマットで報告をいただく報告
書です。その報告書をいじめ担当教員から教育
委員会に送っていただきますが、実は今年の春
から、日立製作所とAIを使って、いじめの分
析に入りました(資料5)。ついこのあいだ、10
月にその中間報告があつて、まだまだ十分では
ないのですが、こんなことが少し見えてきま
した。学校のいじめ報告書のペーパーは1万7
千枚ありました。件数にしますと9千件ありま
した。毎年フォーマットが若干変わっているの
を統一することをやりました。

このときに、深刻化の定義を明らかにして、
その定義に基づいて、どんな場合に深刻化が起
きるか、深刻化する割合が高い場合はどうい
う要因か何なのか等が少し見えてきました。

「教員の気づきによって」発覚した事案、最
初の発覚の端緒。親から連絡があつたのか、い
じめられた子どもが連絡したのか、周りの子ど
もが連絡したのか、まったく関係ない警察や児
童相談所や相談センター等から連絡が来たの
か。どこからいじめというものが分かってきた
のか。そういうときに教員の気づき、「あ、な
んかあつたんとちがうやろか。」。ちょっと聞
いてみたら、やっぱりそうだったという「気づ
き」。教員の気づきだった場合は深刻化の割
合が低い。当然のようですね。教員の気づき、
アンケート、被害者本人、他の児童から、被害の

児童の保護者、その他、と比べたときに、この深刻化する割合を見ると、アンケートによって発覚という事案も深刻化の割合が低いです。これを見ますと、1.3倍、1.3倍、0.8倍、0.7倍ということで。このことから今のことが言えると思いますね。

ここで、また読んでいただいたら結構なのですが、ここだけ言っておきますと、「教員の気づきをより向上させるために」、教員が子どもたちのいじめだけではなくて、不登校の問題もそうです、虐待の問題もそうです。子どもに関わるあらゆる事案をしっかりと私たちが把握するためには、教員の気づきというものがやはりすごく大事です。そのためには教員の自己理解、教師として自分は何が強みで何が弱みなのかを理解できているか、自分は教師として一人一人の子どもの状況、背景や特性を理解しようとしているか、また、理解を深めるためにどういうことを努力しているかということをしっかりと

振り返る。そして、気づきを向上させるためには、子どもの表情や仕草からそのときの思いや感情を読みとる、そういった力、子ども同士の何気ない会話から、その関係性を捉えるという、そんな力というものが、今やはりわれわれに求められている。教育関係者に求められているのではないかなと思います。

次のポイントは「被害保護者からの訴え」によって発覚した事案は、深刻化の割合が高い（資料6）。親御さんから朝電話がかかった。担任の先生に「今日休ませてもらいます。」「どうされました？」「実は昨日から学校に行きたくないと言っています。どうもいじめがあるようです。やっと昨日の夜、話をしてくれました。」という話で保護者から伝えられたものについては、深刻化の割合が高くなるということです。

いじめを受け、悶々とした気持ちで子どもが帰る。その表情で親がそのことに気づき、「どしたん？」「うん、別に。」「なんや、ご飯しっ

資料5 大津市いじめ事案実証実験 「いじめの事案のAIによる予測と分析」から

発覚経緯

教員の気づきによって発覚した事案は、深刻化の割合が低い
アンケートによって発覚した事案は、深刻化の割合が低い

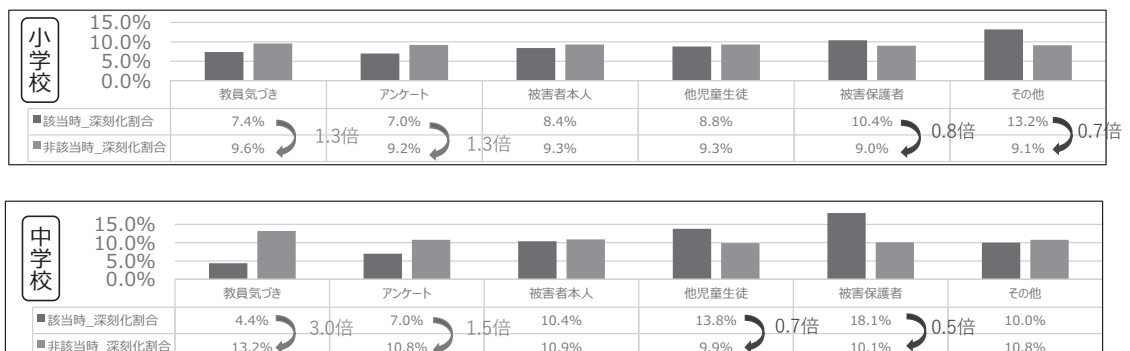


図:小中学校におけるいじめ事案の発覚経緯別、事案深刻化状況

資料6 被害保護者からの訴えによって発覚した事案は、深刻化の割合が高い

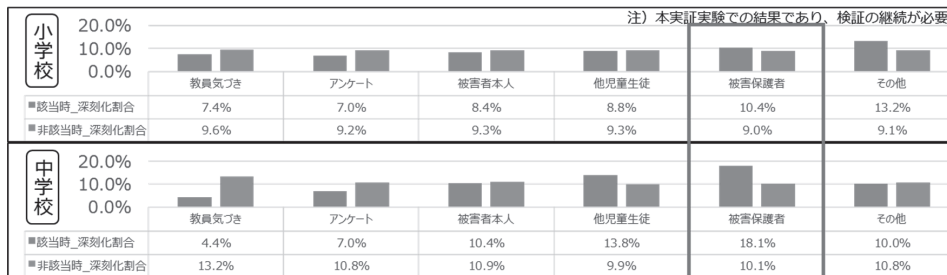


図:小中学校におけるいじめ事案の発覚経緯別、事案深刻化状況

被害児童生徒が悲しい思いをじっと胸に抱きながら帰宅し、保護者の前で一気にその悲しさが吹き出し、保護者も驚いてしまう。「担任、学校は気づかなかったのか？うちの子どもはこんなに悲しい思いをしているのに、どうなっているのだ」と憤慨されることもある。

翌日、連絡を受けた学校がその思いをしっかりと共有し、いじめ対策委員会を直ちに開催し、方針を立て、被害児童生徒からの聞き取りをはじめ、早期に対応をスタートさせていくのが通常の経過である。しかしながら、保護者からの連絡の捉えが甘かったり、ズレたりすると対応がおくれ、深刻化していくケースがある。

また、「いじめ」が疑われるにも拘わらず、被害児童生徒の思いを十分にくみ取れない時、被害加害の双方の児童生徒に、同時に一堂に事情を聴き、双方が考えることが必要と「喧嘩両成敗」的な指導に終始することはあってはならない。

かり食べてへんやん。食欲ないの？」「うん、あんまりないねん。」「学校でなんか嫌なことあったん？」「いや、別に。」「ちゃんとお母さんに話してよ。どうなん？」「う～ん。明日僕学校に行きたくないねん。」ということからわかってきた場合、学校ではきっと、子どもは何もなかったかのように普通に過ごそうとしますが、察知されないようにしているのでしょうか、それはどこかで「先生に言っても友だちに言ってもなかなか問題は解決しない。」と、自分で抱えてしまう。「学校に行きたくない。」ことはやはり深刻化ということになるケースが高いように思われます。

それから、ここですね。「いじめ」が疑われるにも拘わらず、被害児童生徒の思いを十分にくみ取れない時、被害加害の双方の児童生徒に、同時に一堂に事情を聴き、互いに考えることが必要です。加害の子はこれが問題だ、いじめを受けた子にもこれが問題だと、「喧嘩両成敗」的な指導に終始することはあってはならない。と

書いてあります。

学校の先生、とりわけ生徒指導の先生は、その日に起こったことはその日にしっかりと指導しきる、ということが定説なんのです。指導を積み残すな。何をその指導の終着点にするかといえは、指導して両方が謝罪をし、了解をした。これを求めようとする。大津事案はこれなのです。

A君とB君、ものすごく仲が良かった。モンスターハンターで夏休みは何回もお互いの家に行って、夜通しゲームをしたり、9月に入って2学期になったらお互いに仲良くして「この2人、ものすごく仲がいいな。」ということで、今度はプロレスごっこに入る。ところが、亡くなったA君は、プロレスごっこでやられてばかりになって途中でちょっと嫌になって距離を置きたくなった。しかし、B君はそれがわからず、どんどんどんどん攻撃をする。嫌や、嫌やと思っているのにやっている。周りの子も先生も「またやってるわ。」と無関心。ところがも

う無理ということで距離をおいた。

ある日、トイレでばったり出会った。B君はA君に対して、力関係はB君が完全に上ですから、「お前、喋り方うっとうしいねん。前から言うてるけど、腹たってたんのや。殴ってええけ?」。A君はこれ以上また何か言われてもいやだし、「殴ってもええよ。」と言ったら、B君はA君の顔面を思い切り殴った。B君はA君に対して、「俺だけ殴ったらあかんし、お前も殴り返してこい。」。A君は殴り返さないとまたいろんなことがあるので、その日の晩の塾で他の友だちに「初めて人を殴った。」と言って、A君はB君を殴った。それに腹を立てて殴り合いになった。

それをトイレに入ったところでやっていて、6時間目が終わって次の学級活動の5分の間の出来事です。たまたま通りかかった同じクラスの女の子がそれを見て「わ、大変や。やられてはる。」と思って、ダーッと行って教室の入り口を開けて、「先生、やられてはる。助けてあげて。」と声をかけました。先生は学級活動がこれから始まる。6時間目は特別教室の授業だったので、貴重品を先生が預かっていたので、「はい、これ誰の財布ですか。」「これ、誰の時計ですか。」と言って、貴重品を返していた。担任の先生は聞こえていたかどうかは分からないが、それに対して反応しなかった。その女の子は「もうええわ!」と思って、廊下に出て他の先生を探しに行って、他の先生に「先生、行って!」と言って一緒に行ったらもうすでに終わっていた。副担任の先生が担任の先生に話をした。

そして、学級活動が終わって、掃除が終わって、20分後に職員会議がある。朝からホームページに何者かがアクセスしたことがあって、1日中職員室はその話で紛糾している。学校の内規

では、そういう殴り合いやトラブルがあったときには、両方を別々の先生が事情を聞いて、話を合わせて指導をする。そして親に連絡をするということになっていた。しかし、担任の先生は、自分が学年の生徒指導担当だったので、両方の子どもを放課後会議室に呼んで、「何があったんや?ちょっと言うてみ。」「最近2人に距離ができてきて、疎遠になっていたから腹が立って。」「A君に殴っていいと聞いたら、A君ええよって言ったし。」「A君、そうなんか?」「俺が殴り返せと言ってたら、Aが俺を殴ってきた。」「A君、そうなんか?」「そうです。」「何をしてるんのや。お前ら仲間やないか。同じグループやろ。何をしてんのや。はい、握手して、ハグして。」ということで、先生に勧められて握手をした。そしてハグをした。これが「先生、信用ならん。」と、子どもがまったく学校に対して「信用できない」と思い始めた。というように孤立化していったのであろうと、第三者委員会は報告書に書きました。

だから、そのときのいわゆる仲直りとか、握手させるとかいうことはいじめ問題の終着点でも何でもない。トラブルはいっぱいあります。でも、その日に握手して「ごめんね。」ということで両方が和解することはある。しかし、和解できないこともある。その関係に距離ができたなら子どももしばらく両方関わりをもたないように、ちょっと距離を置きましょうか、ということもありうる。それを境にして一切口をきかないということもある。仲直りさせたらいいと教師自身思い込んでいることがある。とりわけ、そういうものが小学校の低学年の中にある。それがしっかりと子どもの様子、子どもの声なき声にしっかりと耳を傾けて、私たちは子どもたちの心的心声をどう聞き、どう対応するかがすごく大事といわれています。

いじめの場合は「無視」というのがありますね。これが一番困ります。「おはよう！」と言って、自分のいつものグループのところに近寄って行ったら、みんながすーっと知らん顔をする。「あれ、おかしいな。」、中間休みになっても、休憩時間になってもしゃべりに行っても、なんか目も合わせてくれない。なんかあったんやろか、なんかしたんやろか。お弁当の時間の時も、いつもだったら仲間と一緒に弁当食べるけども、椅子を持っていったら、ガシャンと自分だけが阻害される。1人でご飯を食べる。このときの悲しい気持ちというのは、すごく子どもにとっては辛い。もう、勉強どころではない。クラブ活動どころではない。そういったことが起きたときには、自分が無視されて孤独な状況にあることを子どもは表情に出しません。それを認めることはとても悲しいことです。子ども

もは無視されていることは、表情に出さないし、親や教師には言わないのです。だからこういうものの深刻化の割合が高くなる。ということですね。だから「無視」というのが大きな力になっていくということですね。

大津事案の遺族のお父さん、私は10月の12日に、いつも命日にお参りに行きますが、毎回そこでいろいろな話をします。「先生ね、人を殺すのに何もいらんんです。態度だけで人を殺せるんです。これがいじめなんです。暴力や刃物は何もいらんのです。言葉。態度。それさえあれば、人は死んでしまうんです。そのことをしっかりと教育で教えて下さいね。」ということを遺族の方から言われました。まさしくそうだと感じています。

次のテーマはこれまでなかった新しいテーマで、「加害者が男女混在の場合」（資料7）。こ

資料7 加害者が男女混在の場合、深刻化の割合が高い

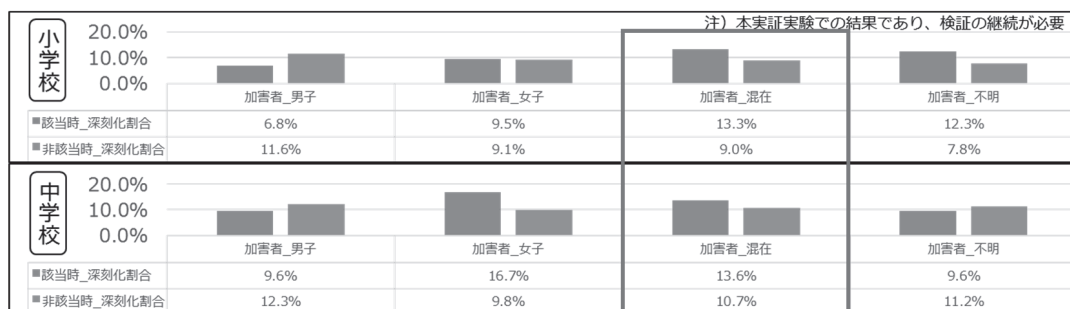


図:小中学校におけるいじめ事案の加害者性別毎、事案深刻化状況

加害者が男女混在の場合、重篤化割合が高くなる傾向という結果は、新しい視点である。何故、その様なことになるのかは、より多くの事例をもとに検討が必要である。ただ今までの知見では、以下のことが考えられる。それぞれの異性を意識して攻撃の行為がエスカートすることがある。

通常は、「そんなひどいこと!」「そこまでやるの?」という異性からの声に呼応し、互いの異性を意識して攻撃が鈍ることが多い。

上記のようなことが学級内で始まることは、第三者の目、いわゆる観衆や傍観者の思いや意識が低く、いじめを促進する方向へある。学級集団全体に落ち着きがなく、好き勝手な行動が増え、居心地の悪い状況が考えられる。その結果、いじめ、嫌がらせ、学習の不定着。不登校などが起こってくる。

一人一人が大切にされ、約束や規律が守られる学級集団づくりが求められる。

れを見てみるとおもしろいのは、加害被害が女子、これも結構深刻化する割合が高い。しかし、それよりも高いのは、男女が混在している場合です。これはこれから研究をしていく必要があります。加害の方は男子も女子もいる、そして被害の方が男子の場合、これが一番多いですね。これは今後の私たちの研究資料となります。「どうなのか」ということはまだどこかでお話ができたらいいなと思っています。こういうことが一応データとして出てきています。

これは当たり前といえば当たり前ののですが、「加害者指導」、「被害者のケア」、「加害者の保護者の説明」を実施すると、深刻化の割合が下がる可能性がある。実際に下がっている（資料8）。

それはそうですね。でも、加害者の指導というのは先程も言いましたように、それは加害が誰であるかが特定できない場合、なんかの事情

があってその指導が遅れた場合、という場合は深刻化する可能性がある。被害者ケアは必ずしますよね。加害者の保護者に説明をする。その説明が非常に難しくなっている。「おたくの息子さんがいじめをしました。学校としてはこれをいじめと捉えています。このように指導しました。」と言うと、「先生、それはいじめですか？子ども同士のトラブルでしょ。」、いじめという言葉に反応し、本質が離れたところで親と学校の関係が難しくなってしまう。「いじめになったら、損害賠償請求があるのでは」と考える親もいるでしょうし、「うちの子はそんなことはないです。子どもに聞くとそんなことはない、いじめはしてへんと言う。うちの子どもを信じる。」という、加害者とされる子どもの保護者と話をするとき、どう話をするのか、重要な問題ですね。

気になる子どもの親とは、日常の関係性を大

資料8 加害者指導「被害者ケア」「加害保護者説明」を実施すると、深刻化の割合が下がる可能性がある

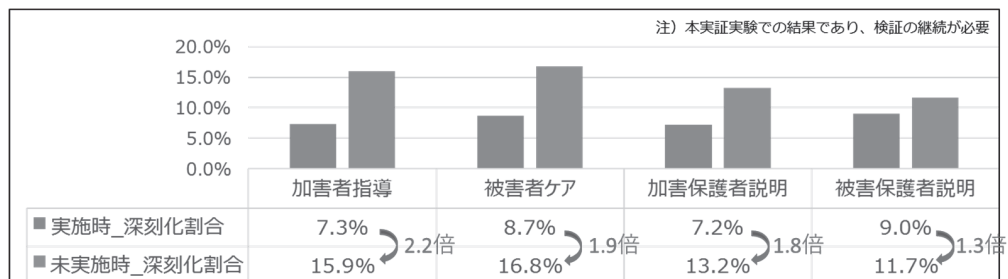


図:小中学校におけるいじめ事案発覚後24時間以内の実施指導別、事案深刻化状況

「加害者指導」「加害保護者説明」は、いじめの事案が発生した場合、当然行うべき事柄であるが、加害者が不明、被害者本人・保護者から加害者への指導は行わないでほしいとの表明があった場合には行えない時はあるが、加害の児童生徒には、自分が行った行為が相手に大きな影響を与えていることの自覚を促し、「何がいけなかったのか」「どうすべきであったのか」を自ら考え、自省を促す指導が大切です。また、「加害保護者説明」は、保護者にそれぞれの時点での事実関係や今後の指導方針等を説明し、協力を求めることは重要である。

「被害者ケア」は、いじめの被害者は、毎日苦痛の連続で心の中で戦っています。心をすり減らしながら、奮闘しています。本当なら、楽しい学校生活のはずなのに。楽しく遊んだり、楽しく勉強できたりするはずなのに。いじめを放置されることによって、自信を失い、劣等感をもち、人間不信に陥り、自分が小さく汚れたような感覚に支配され、無力感に陥り、成績が下がり、神経症的な症状が現れ、不登校になったり、さらに長期的な影響が残る子もいます。いじめ被害の児童生徒をどう守るのが問われます。

事にしておくことが大切とされています。何気なく家庭訪問して、そしてお茶を飲む関係性ですね。それは今から20年も30年も前の話です。今は、家庭訪問して喜ぶ親はほとんどいません。来てもらったら困る。何かあったら学校へ行きます。何かあったら私の携帯電話の緊急連絡先がありますから、そこへ連絡してもらって結構です。話は電話です。「フェイストゥフェイス」、顔と顔ではいけないので、相手に本当のことがなかなか伝わらない。やはり、言葉だけではなくて、教師の顔の表情とか仕草、態度でもって、「おたくのお子さんを大事にしながら指導している」ということがなかなか電話では伝わらない。

だから、会って家庭訪問させてほしい。けれども、「何で先生来たのかと思われるのも嫌やから、家に来てもらったら困る。何かあったら学校へ行く。学校へ行きますわ。」というけれども、学校は敷居が高いから構えて来られる。「何かあったんかな。」「何を言われるんやろ。」と保護者が学校にお見えになる。だから、学校の姿勢というのがそこで問われる。「お母さん、お忙しいときに、来て頂き有り難うございます」、「おたくの子さんこんなことがありました。」「私たちはお子さんに対して、こんなまなざしでもって指導しています」、「がんばって彼がやっていること、彼女がやっていることをしっかり応援していきたいし、お母さんも協力して下さい。一緒にやりましょうよ。」、「彼が今ここでこの課題を克服することが大切です、私たちはそのことに力を入れたいのです。」、というメッセージがどう伝わるのか、これが加害者の指導のポイントになるのです。

いじめをするということは、先程言いました、これは。「人間の攻撃性がある」ということです。ちょっとまたこれは見ておいてください。

こんな文献がありました。「いじめに関わる脳内物質、オキシトシンです」。何かというと、「オキシトシン」というのは、その性質から愛情ホルモンと呼ばれる。脳に愛情を感じさせたり、親近感を感じさせる。いわば人間関係を作るホルモンだそうです。オキシトシンは人間の感情に直接に作用し、愛情やきずな、仲間関係を養成するホルモンであり、共同社会を構築するのに不可欠なホルモンとされています。しかし共同社会づくりに欠かせない側面がある一方で、オキシトシンが仲間意識を高めすぎると「妬み」や「排外感情」を同時に高めてしまうという負の側面も持っています。愛情ホルモンですが、それを高めた場合にこういった負の問題が出てくる。ということです。ホルモンの注目するというのもこれからのひとつの方法かなと思います。

皆さん方、リストカット、自傷行為というのが子どもたちの中にあります。私も何度も見ましたが、手首に何筋、何筋もの傷跡がある。包帯を巻いて、リストバンドをしている子もいれば、それでは飽き足らずアームカットをし、ボディカットをしていく子もいる。失敗したら大変なことになる。この手首のところの動脈を、ここをギリギリにやるとダーッと血がにじんでくる。なんであんな痛いこと、怖いことができるのか。それは、現実と意識の乖離が起こっていたということです。そういった乖離が起こったときに人間には防御反応があって、切ったときに子どもたちは異口同音に「スーッとした」と。脳で痛みを和らげるため、幸福を感じるホルモンが同時に出るのです。だから、痛みを本人は感じていない。ただ意識が乖離していないときにやると相当痛い。意識が乖離してカーッと自分が興奮状態にあるときに、そういうことをするとホルモンの作用で痛みを感じな

い。だから私たちもこれから注目していく必要があると思います。

森田洋司先生のいじめ四層構造を見てみますと、私たちはこの相談者、このいじめ自体にはなかなか直接関与できないけれども、いじめの行為が終わったら、それを見ていた相談者的な立場にある子どもが寄ってきて「一緒に帰るか、大丈夫か。」と、そっと声をかけることで随分違いますね。「今度、釣りに行くけど、日曜日、一緒に行かへんか？」とか。そのいじめとか、その関わりに直接関与できてないけれども、「あなたのことが心配」「何もできひんけれども、力になれないけれども、そんなことしかできひんかもしれないけれども、僕は、私は、あなたのことを心配している」というメッセージで、最後の、子どもが自死するといったところを防ぐことができます。「死んだらだめや！」「先生に言おう！」ということだけではなくて、子ども同士のそこのつながり、実はこのつながりを作るのが、われわれの教師の役割です。教育の役割はそこにあると思います。教育は何をやる

のか。教育活動を通じて、学校のカリキュラムを通じて、子どもに自信をつけることと、そして子どもと子どもをつなぐこと。われわれは、教育課程、カリキュラムを通じて子どもの心に火をつけること、やる気を出させることです。子どもと子どもをどうつないでいくか、そういったものがわれわれの役割かなと思います。このいじめ問題で、大事なポイント、また不登校の問題でも大事なポイントはそこじゃないかなと私は思います。

次に、この3つの要素があるといじめが発生する（資料9）。ここでちょっと見ておきたいのは、「ヴァルネラビリティ」。「ヴァルネラビリティ」というのは、あまり聞かれたことはないと思いますが、何かと言うと、「いじめられる子のヴァルネラビリティ」というのがあります。

「攻撃誘発性」と言います。特性があって、こだわりを持っている子は突拍子もないことをポツと言うことがあります。漫画家の蛭子能収さん。あの人はお葬式でしーんとなっていると

資料9 いじめられる子の「ヴァルネラビリティ」

(Vulnerability:攻撃誘発性)

- ① 特異な身体的な違和感や行動面から生じる攻撃誘発性
 - ・身体に障害がある子ども、協調性に欠ける子ども
 - ・服装がだらしない、とげとげしい言葉遣いをする子ども
 - ・帰国児童生徒、転校生
- ② 集団の価値基準からはみ出していることから生じる攻撃誘発性
 - ・過剰なほど「正常・健康・中心志向」の高い社会
 - ・異質なものを排除しようとする雰囲気支配する集団
- ③ しつとやねたみから生じる攻撃誘発性
 - ・成績のよい子などよく目立つ子がターゲットになる
 - ・過度の平準化圧力がかかる

きに、笑えてしょうがないと、何を非常識なことを言うかと思いますが、彼はそういう特性を持っているのです。そういう人は他にも聞いたことがあります。笑えて仕方ない。人が悲しい思いをしている、しーんとなっているときに、何という不謹慎な、批判することは簡単ですが、その人はそういう特性であるのです。そういう特性が出たときに、それでもって攻撃を誘発してしまうという、こういうものがやはりあります。それは発達の問題であったり、障害であったり、その子の生活の背景であったり、いろいろなことがあると思います。そういった子どもを私たちは、この3要素というものをしっかりと頭に入れていく必要があると思います。

時間が来てまいりました。私が今日一番言いたかったのは、不登校の問題、いじめの問題、子どもたちが抱えている問題がいっぱいあります。しかし、この問題を、子ども一人一人にどういうまなざしを向けるのか、向けたまなざしで、みんなでそのことを理解し合って、同じ方向を向きましょう。そして、色々な人がいていいんだよ。そういった社会を作っていく。社会的包括という、そういったことを私たちが意識をしながら、学校では集団づくりにもつながるでしょうし、社会もそういった社会づくりをしていくことが必要ではないでしょうか。その意識を持ちながら教育が進んでいったら、随分変わってくるだろうと思っています。

本当に中途半端な中で終わってしまいました。最後までお話を聞いていただいて本当にありがとうございます。これで終わりたいと思います。ありがとうございました。